

高齢期にある人が認知症の模擬患者を演じる 体験を通して得た認知症への理解と認識

研究者：佐野望¹⁾、北川公子¹⁾、田中敦子¹⁾、野田陽子¹⁾、松戸典文²⁾

1) 共立女子大学 2) 神奈川県立保健福祉大学

キーワード：認知症高齢者、模擬患者、看護学生、演習

要旨：

本研究の目的は、高齢期にある模擬患者が看護学演習に参加し認知症高齢者を演じたことで得られた認知症への理解と認識を明らかにすることである。研究方法は、認知症高齢者とのコミュニケーションをテーマとした高齢者看護学演習に参加した模擬患者8名を対象とし、認知症高齢者を演じた体験について半構成的面接法にてインタビューし、データを得た。その内、向老期から老年期にある7名のデータを分析した結果、5個のカテゴリー、11個のサブカテゴリーを抽出した。その内容は、認知症を演じる模擬患者は、＜過去における認知症の人に対する対応への戸惑い＞を抱き、認知症高齢者を演じる機会を得ることで、＜演じるための自分なりの学習への取り組みと発展＞から＜認知症の人への適切な対応の理解＞へと深化したことで、戸惑いを払拭していた。そして、＜より良い対応が行える自己への自信と前向きな意志＞により、演習を通して認知症の人への対応を学生に継承し、自分が認知症になったとしても適切な対応を受けて穏やかに過ごせるよう期待を寄せ、＜鮮明さが増した将来の自己と社会＞にまで認識を拡げていた。

高齢期にある人が認知症高齢者を演じ演習に参加することは、高齢期にある人の認知症への理解と認識に変化をもたらした。それは、認知症に対する理解の深まりと共に、過去の認知症の人に対する戸惑いが認知症の人への適切な対応への自信になった。その自信は認知症の人へのより良い対応を看護学生に唱道する力となり、将来の自己や社会の姿にまで認識の幅を広げていた。

1. はじめに

わが国の平均寿命は年々延伸し、高齢者の4人に1人が認知症またはその予備群であると言われている。もはや認知症は、家族として、あるいは当事者として誰もが関わる可能性のある身近な病気となった。厚生労働省は、今後の認知症高齢者の増加に伴う施策として、団塊の世代が75歳以上になる2025年を目標に、認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会を目指した認知症対策推進総合戦略を示した¹⁾。この戦略は、認知症高齢者を対象としつつも高齢者全般とその家族へ向けた施策ともなり得る。

高齢期にある人は、残された未来を生き抜くための英知の感覚を統合し、現在生きている世代の

中でうまく釣り合う位置に自分を置き、無限の歴史的連続の中での自分の場所を受け入れるという課題に直面する²。認知症高齢者が増加する社会の中、自身が認知症になるのではないかと不安を抱え³⁻⁵⁾ながら、自分自身の残された未来をどう生き抜くかを考え、課題に立ち向かっていると言える。このような社会情勢の中、高齢者看護学分野では、高齢期にある人々が自分らしく暮らし続けることができるための支援者を育成し輩出させたいと考えている。

その取り組みとして、本学部の高齢者看護学領域では、実際の高齢期にある人が授業へ参加するプログラムを実施している。その目的は、看護学生が高齢者への理解をより深めること、そして、高齢期にある人が、後に続く看護学生である若者の未来を導くための継承者としての役割²⁾を果たすことである。具体的には、ゲストスピーカーとして一般高齢者を授業に招き、個人の豊かなライフレビューを語り、看護学生はその表現された言葉の意味を考え、高齢期にある人の理解を深める内容である。また、認知症高齢者を演じる模擬患者を導入したコミュニケーション演習では、リアルな臨床場面を再現することで、認知症高齢者と接する際の看護学生自身の態度やコミュニケーションを行う上での具体的な技術を考える機会が得られる⁶⁾よう工夫している。しかし、このような取り組みが、授業に参加した高齢期にある人にとってどのような意義があったかの検討はできていない。

先行研究を概観してみると、高齢期にある人が認知症高齢者を演じ演習に協力することへの意義について検証し報告した研究は見当たらない。これらを明らかにすることで、高齢者への支援の示唆が得られるのではないかと考えた。よって本研究は、高齢期にある人が認知症高齢者を演じたことで得られた認知症への理解と認識を明らかにし、高齢者へ向けての支援となりうる意義について考察することを目的とした。

Ⅱ. 用語の操作的定義

模擬患者

模擬患者 (simulated patient: 以下「SP」とする) とは、医療に従事していない一般の人が、看護学生の教育のために一定の訓練を受けて演習に参加し、実際の患者と同じような症状や会話を再現できる患者役である⁷⁾。

Ⅲ. 研究方法

1. 調査対象者

調査対象者は、某組織で訓練を受けたボランティアのSPであり、高齢者看護学援助演習の「認知症高齢者とのコミュニケーション演習」に参加し、本研究への参加承諾が得られた8名であった。なお、演習の事例設定が女性の認知症高齢者であるため、参加者は全て中高年の女性であった。

2. 調査期間

調査期間は、2014年11月から12月までである。

3. 調査内容与方法

1) SPが参加した演習の概要

当該科目「高齢者看護学援助演習」は、2年次後期開講科目であり、履修者は1年次後期の「高齢者看護学概論」、2年次前期の「高齢者看護学援助論」を修得している看護学生である。約50名を1クラスとした90分授業で、SPの参加によるロールプレイを組み込んだ授業を2クラス別日に実施した。

演習のテーマは「認知症高齢者とのコミュニケーション」であり、学習目標を、①認知症高齢者とのコミュニケーションのよりよい方法を自分で見出そうとすることができる、②高齢者を理解するための思考を深めることができる、とした。事例を設定し、SPには事前にシナリオを提示し説明を加えて、演じるための準備期間を設けた。

2) 事例の内容

演習の事例は、81歳の認知症を患う女性とした。女性の設定は、夫が3年前に亡くなり独居生活になった頃より認知症の症状が出現し、家族の介護力が不足しているため、特別養護老人ホームに入所して2週間経過した状況である。この女性は、夫の死を認識できず、自宅へ帰りたという願望を日々訴えている。演習のロールプレイは、実習2日目の看護学生が自宅へ帰りたという訴える女性を演じるSPに対応する場面とした。

3) 演習方法

SPの4名各々が、割り当てられたグループの看護学生役1～2名を相手に、8分間のロールプレイを4グループ同時に実施する。グループを替え、同じ事例で計3クールロールプレイを実施する。ロールプレイが全て終了したら、同じSPとロールプレイをした全グループの看護学生が合同でSPからのフィードバックを受けた。なお今回は、前半クラスと後半クラスでは、異なるSPが参加した。

4) データの収集方法

演習が終了したその日のうちに、演習に参加したSP4名に対してグループインタビューを実施した。グループインタビューにした理由は、互いのやりとりの中で、自分自身でも気付かなかった点が見え、潜在的な意見まで語られること⁸⁾を意図したためである。

インタビュアーは、主任研究者と共同研究者の2名が担当した。主任研究者の主導によりインタビューガイドを用いて順次質問項目毎にSP各々の体験や考えを聞き、SP間で発言の内容の補足やコメントも交え、話の流れによっては、インタビュアーがSPの発言を裏付ける確認をとりながら進めていった。グループインタビューにより得られた発言内容は、研究対象者の了解のもとICレコーダーに録音した。

5) インタビューの内容

インタビューの内容は、ガイドとして提示した。インタビューガイドに示した内容は、①SPの年代、模擬患者の実施開始年ときっかけ、認知症高齢者のSP経験回数、②演習に向けて行った準備、③看護学生とのロールプレイや看護学生へのフィードバックを通して感じたこと、考えたこと、④

高齢期にある人が認知症の模擬患者を演じる体験を通して得た認知症への理解と認識
認知症高齢者を演じたことで得られた自分自身にとっての意味についてである。

4. 分析方法

分析方法は、「認知症高齢者を演じたことで得られた認知症への理解と認識」についての内容を逐語録から抽出した。その内容の意味を損なわないように一文一義の短文にし、意味内容の類似性に沿って、コード化、サブカテゴリー、カテゴリーと抽象度を高めた。

5. 倫理的配慮

調査対象者への参加依頼は、調査対象者が所属する機関の代表者を通して行った。まずその代表者に、調査目的、方法、自由意志による参加、個人情報保護について説明した。その後、同内容を調査対象者に説明し、文書で同意を得た。また、インタビュー内容から個人が特定されないように、匿名化を図った。インタビューをする場所は、個室とし関係者以外の出入りができないようにした。

本研究は、共立女子大学の研究倫理審査委員会の承認（承認番号 KWU-I RBA#14054）を受けて実施した。

Ⅳ. 結果

1. 研究参加者の属性（表 1）

研究参加者 8 名の年齢は 60 歳未満が 1 名、他は 60 ～ 80 歳代であった。参加者の中で SP として認知症高齢者を初めて演じた者は、年齢 60 歳未満の 1 名であり、その他は複数回演じた体験者であった。研究目的の主旨より、向老期から老年期である 7 名のデータを分析した。

2. SP が認知症高齢者を演じたことで得られた認知症への理解と認識（表 2）

コード化したインタビュー内容を分析した結果、5 カテゴリー、11 サブカテゴリーが抽出できた。以下、カテゴリーを< >、サブカテゴリーを< >、コードを【 】で示す。必要時、短文化した語りを「 」で表現する。

カテゴリーは表 2 のように、<過去における認知症の人に対する対応への戸惑い>、<演じるための自分なりの学習への取り組みと発展>、<認知症の人への適切な対応の理解>、<より良い対応が行える自己への自信と前向きな意志>、<鮮明さが増した将来の自己と社会>であった。

1) <過去における認知症の人に対する対応への戸惑い>

<過去における認知症の人に対する対応への戸惑い>には、3 つのサブカテゴリーがあった。

SP は近親者の介護を体験していた。具体的には「祖母がボケかかってトイレの場所が分からなくなった」や「父が、最期少し日にちが分からなくなった」、「母が軽い今日の演習のような認知症になった」などであり、【認知症になった祖母や父、母を介護したときの思い】とした。そして、「認

表1 SPの属性

ID	年齢	SP活動年数(年)	認知症高齢者のSP経験有無
1	80歳代	17	有
2	60歳代	11	有
3	60歳代	10	有
4	70歳代	9	有
5	60歳代	9	有
6	80歳代	8	有
7	60歳代	4	有
8	60歳未満	4	無

表2 高齢者看護学演習においてSPが認知症高齢者を演じたことで得られた認知症への理解と認識

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
過去における認知症の人に対する対応への戸惑い	認知症の近親者を介護したときの複雑な思い	認知症になった祖母や父、母を介護したときの思い 暴力的な男性の認知症の症状が怖かった
	認知症の悪い印象	報道からの認知症の嫌な印象 認知症にはなりたくない
	誤った対応による認知症症状の悪化	家族や親戚の認知症症状の悪化 誤った認知症の人への対応の実際
演じるための自分なりの学習への取り組みと発展	実際の施設で認知症の人への対応を学ぶ	施設で生活する認知症高齢者の現状 認知症高齢者への労を厭わない対応
	様々な機会を通して認知症の人への対応を学ぶ	認知症の人への見本となる対応 積極的に学習の機会を得る 演習に参加したことによる学び
認知症の人への適切な対応の理解	認知症の人の良い変化	認知症の人が私を褒めてくれた 認知症になって穏やかになった
	認知症を自分に置き換えて考えた適切な対応	認知症の症状が安定する周りの人の適切な対応 自分が認知症になるのも悪くない
より良い対応が行える自己への自信と前向きな意志	今後の自己への期待	時間に余裕をもって認知症の人と関わりたい 焦らず認知症の人と関わりたい
	認知症の人への良い対応の実体験	正しい知識が必要 認知症の人の話を受け入れる 演習で再確認できた認知症の人へのゆったりした対応の重要性
鮮明さが増した将来の自己と社会	認知症へ近づく自己	グループホームの利用者と間違えられた自分 認知症を自分のこととして考えるきっかけになった
	認知症への適切な対応への期待	増加する認知症の人を社会全体で支えようとする傾向 看護学生が認知症の人への適切な対応ができることへの期待

知症の父は暴力的で言葉もきつく、そばにいられないくらい怖くなった」と【暴力的な男性の認知症の症状が怖かった】体験をしていた。よってSPの過去の介護の体験を＜認知症の近親者を介護したときの複雑な思い＞としてまとめた。

SPが近親者の介護を体験した頃を振り返り、「テレビの認知症に関する極端な内容を見ると、いずれあのようににはなりたくない」と【報道からの認知症の嫌な印象】と、「認知症だけにはなりた

くないと友達と話していた」ことから【認知症にはなりたくない】気持ちを抱き、＜認知症の悪い印象＞を持っていた。

あるSPは、「認知症の叔父の家族がうまく対応できないと、叔父は本当に否定する」、「叔父は対応が悪いものすごく反発していた」と【誤った認知症の人への対応の実際】から引き起こされた認知症症状の悪化を体験していた。これらのSPの近親者の介護体験は、「徐々に認知症が進んでいくに従って、自分の知っている人だというのは分かるけど、どういう関係かとういうことが分からなくなってしまい、その移り変わりを見てきた」といった【家族や親戚の認知症症状の悪化】する経過を目の当たりにしていた。以上よりSPは、＜誤った対応による認知症症状の悪化＞を日常の中で体験することで戸惑いを感じていた。

2) ＜演じるための自分なりの学習への取り組みと発展＞

＜演じるための自分なりの学習への取り組みと発展＞には2つのサブカテゴリーがあった。

SPは認知症高齢者を演じる準備として、認知症の高齢者が生活している施設を訪問し、「今まで穏やかだった認知症の人が夜になると不安になったりして変わってしまうらしいのです」と【施設で生活する認知症高齢者の現状】を把握していた。また、「グループホームで働いている人は、1日何千歩と歩き走り回っている」「同じことに何十回、何百回と対応している」と【認知症高齢者への労を厭わない対応】をも知ることができた。これらのことから、SPは＜実際の施設で認知症の人への対応を学ぶ＞取り組みをしていた。

そして、「グループホームを見学したら、認知症の方がみんな穏やかだった」と繰り返す同じ対応を受けて穏やかになる高齢者の姿から【認知症の人への見本となる対応】を知る機会を得ていた。SPは、施設の職員の対応による高齢者の変化を見て、「症状が変わっていく経過を間近で見て、とても自分のためになった」と学習の機会と捉え、「私も認知症の勉強をしてオレンジリングをいただいた」など【積極的に学習の機会を得る】ことになった。また、演習への協力に至るまでの経過を「演習に参加して私が勉強させていただいた」と捉え、「看護学生は初めて認知症高齢者と接したら怖いや何していいかわからないと感じたのではないかと看護学生の立場に立っていた。これらは【演習に参加したことによる学び】としてまとめ、SPは＜様々な機会を通して認知症の人への対応を学ぶ＞ことができていた。

3) ＜認知症の人への適切な対応の理解＞

＜認知症の人への適切な対応の理解＞では、2つのサブカテゴリーがあった。

SPは、認知症への関心を抱き理解を深める努力と共に、「施設へ傾聴ボランティアに行くと、どこから来たのか聞いてくれ」たり、「認知症高齢者はきっかけをつかむとすごく話をしてくれる」、「話をしていると、そのうち私のことを褒めてくれる」など、【認知症の人が私を褒めてくれた】と会話が発展する経験をしていた。また、具体的な例として「勝気な母がすごく穏やかになった」、「悪いことは忘れ楽しいことを思い出すようになった」と【認知症になって穏やかになった】身近な体

験は、＜認知症の人の良い変化＞として語られた。

「周りの対応次第で穏やかな認知症高齢者になれることが分かった」と【認知症の症状が安定する周りの人の適切な対応】から、認知症の人への適切な対応を理解したSPは、「認知症予防教室に参加すると、認知症になるのも悪くはないと思う」や、「認知症のことが書いてある本を読むと、色々なタイプがあるから一概に認知症を嫌だとは思わない」など【自分が認知症になるのも悪くない】と思えるように変化した。SPは、適切な対応により認知症の症状が安定することが分かり、自分が認知症になることも受け入れられたため、＜認知症を自分に置き換えて考えた適切な対応＞とした。

4) <より良い対応が行える自己への自信と前向きな意志>

<より良い対応が行える自己への自信と前向きな意志>では、2つのサブカテゴリーがみられた。

SPの認知症の人への理解が深まると、「今後認知症の人と接するときに、時間の余裕が必要」、「自分自身が忙しくてもそれはさておき、余裕を持って接するのが一番である」などの【時間に余裕をもって認知症の人と関わりたい】や、「焦ったらいけないと感じた」、「実際に認知症の人との関わりで急ぐようなことはしていないが、もっと意識することが必要だと思った」と【焦らず認知症の人と関わりたい】といった＜今後の自己への期待＞が高まった。

さらに、「正しい認知症についての知識を持った人なら、適した対応ができる」と【正しい知識が必要】と感じ、「私の経験から、相手の言ったことを受け入れると和やかになる」、「相手が話をしたいことを受け入れることが大事」など【認知症の人の話を受け入れる】大切さを経験していた。加えて、認知症の高齢者として看護学生と関わったことから、「演習で看護学生が接してくれたことで、ゆったりと時間をかけることが大事」であると、【演習で再確認できた認知症の人へのゆったりした対応の重要性】など、＜認知症の人への良い対応の実体験＞から、認知症の人への対応に自信を持つことができた。

5) <鮮明さが増した将来の自己と社会>

<鮮明さが増した将来の自己と社会>は、2つのサブカテゴリーがみられた。

SPが「グループホームへ行ったら、今度ここに来る人なのか」と間違えられ、「私もグループホームを利用する人に見られる年なのだった」と【グループホームの利用者と間違えられた自分】を自覚し、「自分を受け入れてくれる人や話を聞いてくれる人がいれば、認知症になるのも悪くないと思えた」、「自分が認知症になるのは嫌だと思っていたが、認知症になるのも悪くないと思えるようになった」など、【認知症を自分のこととして考えるきっかけになった】。SPはこの演習への取り組みを通して、＜認知症へ近づく自己＞を感じとっていた。

更に、SPの生活の中で「これから身近に認知症の人が増えてくる」現状も実感しており、「社会全体で認知症の人を受け入れる対応が広まってきた」変化も捉えていた。そのため【増加する認知症の人を社会全体で支えようとする傾向】に期待を寄せていた。またこのような社会情勢を担う看

高齢期にある人が認知症の模擬患者を演じる体験を通して得た認知症への理解と認識

護師へ向けて、「私は認知症になりたくないが、なった時はいい対応をしてもらって穏やかに生きたい」と願い、そのためにも「看護学生が勉強して、将来の私たちを看護してくれると思うと安心する」と、この演習に対して【看護学生が認知症の人への適切な対応ができることへの期待】が込められていた。SPは身近に認知症高齢者が増えることも感じ取り、社会全体の課題として＜認知症への適切な対応への期待＞を抱いていた。

V. 考察

認知症を演じる高齢なSPの認知症への理解と認識は、過去の体験から現在、自分や社会への未来へといった時間軸上で変化した。それは、時間経過に沿って認知症の病状やその対応への理解の深まりとともに戸惑いが払拭され、認知症の人に対する適切な対応への自信へ、そして未来に向けての自分と社会への期待へと発展した。

1. 過去の体験から抱いた認知症に対する「戸惑い」

対象となった7名のSPは、60歳以上の年齢であり、向老期から老年期のライフステージにある人たちであった。SPの＜認知症の近親者を介護したときの複雑な思い＞は、年齢相応の体験から抱いた内容であった。過去におけるSPの近親者の介護体験では、認知症の人に対する適切な対応を見聞きし、自分で実施するには至っていなかった。その中でも【暴力的な男性の認知症の症状が怖かった】体験は、当時、認知症の人への対応についての検討が不十分であった結果といえる。

認知症は2004年以前には「痴呆」と言われていた疾患であり、「奇異な、不治の老化現象」と考えられ、社会的にも医学的にもあまり関心を示されていなかった⁹⁾。よって、以前は認知症の病態や適切な対応についての理解が社会全体に浸透されていなかったため、＜誤った対応による認知症症状の悪化＞から＜認知症の悪い印象＞を招き、＜過去における認知症の人に対する対応への戸惑い＞を生じていたと考えられる。

2. 認知症高齢者を演じるための努力から得た「戸惑い」の払拭

SPは与えられた事例の病状をリアルに演じるための準備として、様々な取り組みをしていた。演じる認知症高齢者の実態を知るために、認知症高齢者が生活する施設へ訪問し、＜実際の施設での認知症の人への対応を学ぶ＞ことに努めていた。そして、対応方法によっては、認知症の人の症状が穏やかに変化することを知り、＜認知症の人の良い変化＞として捉えることができた。加えて、自己の認知症についての知識を高めるために本を読み認知症に関連した講座に参加するなど、認知症の人への対応を学習する努力を重ね、＜認知症を自分に置き換えて考えた適切な対応＞の理解に至った。

大学教育の一環に参加することを機に、SPの認知症の人への「戸惑い」は、＜演じるための自分なりの学習への取り組みと発展＞により払拭することができたと考えられる。それは、演じる認知症の症状や病態を理解するために、SPは認知症の人が実際に生活している施設へ訪問し、認知

症の人の本来の姿や介護者の見本となる認知症の人への対応を目の当たりにしたことで、＜認知症の人への適切な対応の理解＞へと移行したからである。

3. 認知症高齢者への適切な対応への「自信」から得られた将来の自己や社会への認識

鹿島は、人生経験が豊かな高齢者が、その経験を活かしながらSPにチャレンジする活動は、高齢者にとって有意義なものになったと評価できる¹⁰⁾と述べている。このように、本学部の高齢者看護学領域における演習は、高齢期にある人が認知症高齢者を演じることで、認知症の人に対して抱いていた戸惑いを認知症の人への適切な対応ができる「自信」へと変化させる有意義な経験となり得た。そして、高齢期のSPが認知症高齢者を演じることは、わが国の今後増加する認知症高齢者を支えるべき看護学生に向けて、認知症の人への適切な対応を導くための大きな力となっていた。SPは、このような継承者としての役割を果たすことで、自分が認知症になったとしても適切な対応を受けて穏やかな生活を送りたいと願う将来の自己を描くことになった。

認知症予防の施策を考えるに当たって、一般高齢者の認知症やその予防に対する意識や関心に関する知見の蓄積が重要となる¹¹⁾とされているように、向老期から老年期にあるSPに認知症の人を演じ演習に参加する過程は、認知症に対する知見を広める機会となっていたと言える。そして、認知症及び認知症の人の対応についての情報を広め、介護への関わりを高める機会を提供することとなり、一般生活者への啓発と共に介護負担軽減に向けた予防的な対策が可能になる¹²⁾一端を担ったと考える。

VI. 結論

向老期から老年期にあるSPが認知症高齢者を演じたことで得られた認知症への理解と認識は次のような内容であった。

SPの認知症への認識は、「戸惑い」から「自信」に変化した。それは、SPの認知症の近親者の介護を体験していた頃は、痴呆と称していた認知症の病態や適切な対応についての理解が乏しかったため、認知症の人やその対応を「戸惑い」として認識していた。その後、大学の教育へ参加する機会を得、認知症高齢者を演じるための学習に取り組み、適切な認知症の人への対応を理解できたことにより、認知症の人やその対応に「自信」を持つことができた。その「自信」が看護学生へこれからの認知症高齢者を支えるための導きを継承する役割を果たす力となり、自分が認知症になっても適切な対応を受けて穏やかに過ごしたいという将来展望を導いていた。

謝辞

本研究に快くご協力いただきましたSPの皆様にご心より感謝申し上げます。

なお、本研究は共立女子大学総合文化研究所の平成26年度研究助成を受けて実施した研究の一部をまとめたものである。

引用文献

- 1) 厚生労働省, “第7章国民が安心できる持続可能な医療・介護の実現”, 平成27年版厚生労働省一人人口減少社会を考える一, 2015/11/15 閲覧, <<http://www.whlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/15/>>
- 2) E. H. エリクソン, J. M. エリクソン, H. Q. キヴニック (朝長正徳, 朝長梨枝子訳): 統合と絶望 英知, 老年期 生き生きしたかわりあい, 新装版, みすず書房, 東京, 57-77, 2005.
- 3) 小林尚司, 木村典子, 神谷智子, 他: 三好町住民の認知症に関する知識と不安, 日本赤十字豊田看護大学紀要, 4 (1), 21-27, 2009.
- 4) 荒井由美子, 熊本圭吾, 傳農寿, 他: わが国の一般生活者の高齢社会に対する意識, 日本醫事新報, 4229, 23-27, 2005.
- 5) 熊本圭吾, 荒井由美子: 一般生活者における認知症罹患に対する不安とその関連要因, 老年精神医学雑誌, 22, 162, 2011.
- 6) 中原順子, 佐野望, 野田陽子, 他: 高齢者看護学教育における認知症模擬患者を導入した演習での学び, 共立女子大学看護学雑誌, 1, 17-24, 2013.
- 7) 藤崎和彦: アメリカ医学教育における模擬患者の導入の現状とその理論, 看護展望, 18 (8), 44-48, 1993.
- 8) 安梅勅江: ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法 科学的根拠に基づく質的研究法の展開, 第1版, 医歯薬出版株式会社, 東京, 1-12, 2007.
- 9) 播本高志, 出野平恵: 認知症ケアにおける基礎疾患と薬, 中央法規, 東京, 2006.
- 10) 鹿島英子, 吉村牧子, 吉本和樹, 他: 高齢者 SP (Simulated Patient) 養成の課題, 関西医療大学紀要, 8, 20-26, 2014.
- 11) 星野周也, 阿部桜子, 朴敏廷, 他: デイサービス利用助成後期高齢者の認知症予防に関する予備的研究—6 ケースの半構造化面接調査から—, 日本健康教育学会誌, 18 (4), 289-297, 2010.
- 12) 柴田由己, 安部幸志, 新井明日奈, 他: 一般生活者を対象とした認知症家族の介護に対する感情尺度の作成, 日本老年医学会雑誌, 47 (4), 315-322, 2010.